

白河街区跡・岡崎遺跡現地説明会資料

2005年6月4日

所在地：京都市左京区岡崎天王町58番地ほか

調査期間：2005年3月15日～7月末（予定）

調査面積：約1,200㎡

調査主体：財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

白河街区跡は、今の岡崎あたりに平安時代後期に造営された六勝寺や白河殿を中心として開発された一帯を指す遺跡名である。六勝寺の一つである法勝寺と平安京の二条大路を東に延長した「二条大路末」を基準として、平安京のように東西・南北に大路や小路が造られ、貴族の邸宅や寺院などと共に町が広がっていたと推定されている。しかし、室町時代になると、応仁の乱による戦火のために寺院や邸宅は焼け徐々に耕地化していった。

遺構の概要

調査地の関係から、北側を1区、南側を2区とした。現在調査中の遺構は、1・2区とも主に室町時代後期のものである。

1区では、室町時代後期の井戸4基と宅地境の南北溝などを検出している。井戸はいずれも石組みであったが、使用されている石の大きさや井戸枠材などに違いが見られる。井戸1は、上部は方形の石組みであるが、下部は縦板を二重に立て横棧で止めたものである。井戸2～4は、円形の石組み井戸で、井戸2の底には四角く枅状に板を組んだもの、井戸3・4の底には曲物が据えられていた。

調査区の南半分の旧地形からは、東から西に雛壇状に低くなることがわかる。柱跡の検出状況から東の高い部分に建物があり、低い部分は空閑地であった可能性が高い。4基の井戸の配置から、宅地が4分割できることが想定されるが、詳しい区画は不明である。

2区では、室町時代後期の石組みの井戸、ごみ捨て穴、建物の柱穴などを検出している。石組みの井戸は、掘形を含めると直径約2.5mと大型で、使用されている石も大きい。内部からは完形の土師器皿や常滑の甕などの土器類、曲物・箸・下駄などの木器類が大量に出土している。井戸の東側には、底に石を据えた柱穴が並び、建物が想定できる。これら建物・井戸・ごみ捨て穴の時期が同じであることから、1区画内の邸宅跡の可能性もある。また、調査区北側にも、数棟の建物があったと考えられる。

まとめ

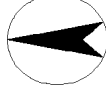
今回の調査では、今まで明らかではなかった室町時代後期の白河街区の遺構を良好な状態で確認することができた。応仁元年（1467）に始まった応仁の乱によって、周辺にあった主だった寺院が次々と荒廃し、畑地化していく中で、その頃にも溝によって区画された宅地が並んでいたことがわかった。しかし、1区東端で検出した溝が2区では確認されていないなど、宅地に関する区画には不明な点も多い。



写真1 1区全景（東から）



写真2 2区全景（南東から）

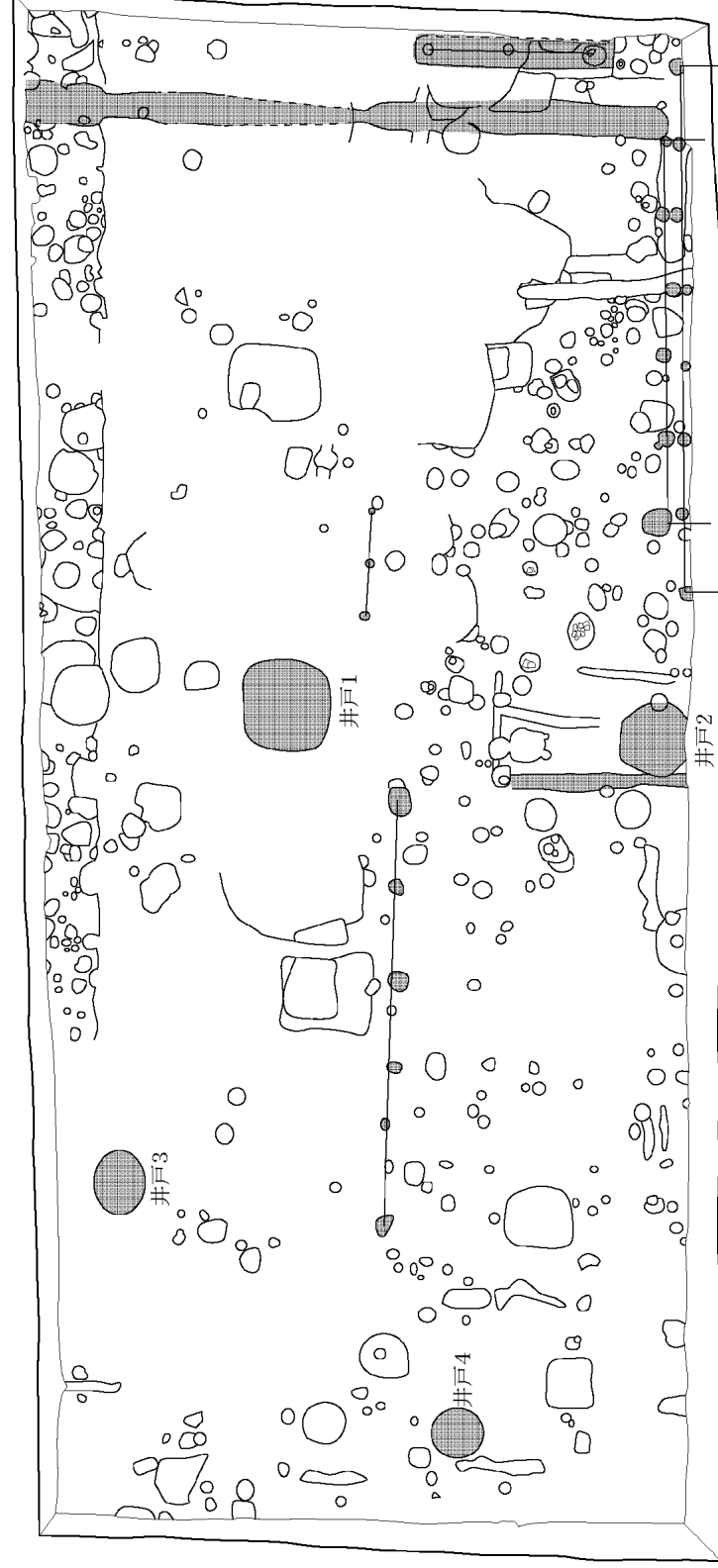


Y=-19,240

Y=-19,230

Y=-19,220

Y=-19,210



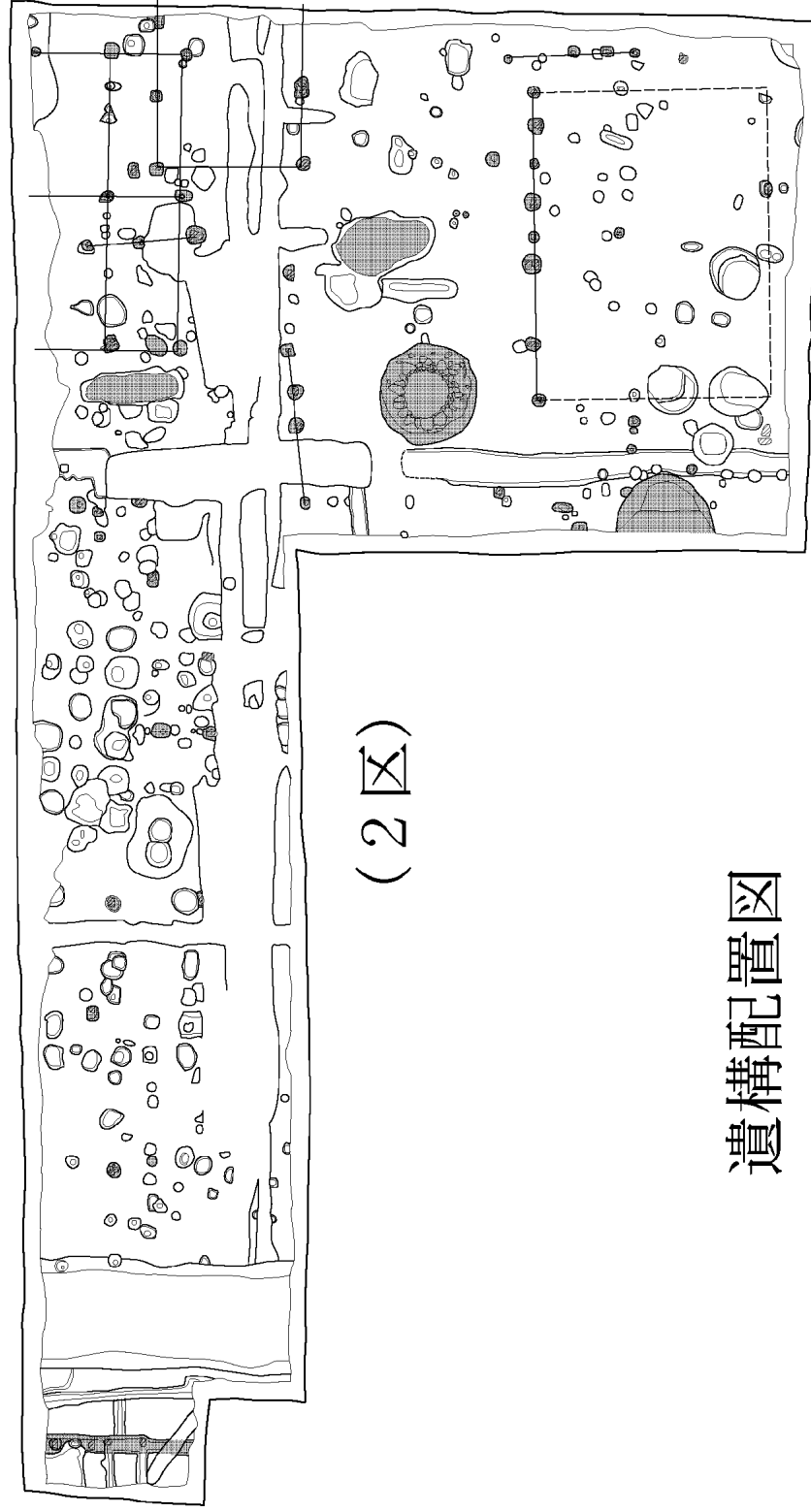
X=-109,420

(1区)

凡例



:室町時代の主な遺構



X=-109,460

X=-109,470

(2区)

遺構配置図